九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

太宰治と中国 ： 作品における中国的モチーフについての考察

劉, 金宝

https://doi.org/10.15017/1500470

出版情報：九州大学, 2014, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏　　名	劉　金宝
論　文　名	太宰治と中国 ―作品における中国的モチーフについての考察―
論文調査委員	主　査　　九州大学　　准教授　　西野　常夫 副　査　　九州大学　　教　授　　松本　常彦 副　査　　九州大学　　准教授　　波潟　　剛 副　査　　九州大学　　教　授　　東　　英寿 副　査　　九州大学　　准教授　　秋吉　　收

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文は、太宰治の小説やエッセイの中で、中国的な要素（中国文学からの引用、中国の歴史、文化、政治、地理などについての知識）がどのように利用されているかを　考察したものである。太宰と中国との関わりについての先行研究は主として小説「股をくぐる」、「清貧譚」、「竹青」、「惜別」と中国文学との比較研究に限られているが、本論文では、先行研究で検討されていない太宰と中国的な要素の接点に焦点を絞って考察を加え、これまでの研究の欠落部分を補い、太宰と中国の関係の総合的な研究に資することを目的としている。

本論文の概要は次の通りである。第一章では、中国人に読んでもらうために書いたと太宰自身が述べている「竹青」と「惜別」における中国古典と中国地理にかかわる要素をまとめた上で、太宰がなぜ、この二作に中国古典や中国地理を多く取り入れたのかという問題を検討し、その結果、太宰は時局に配慮し、東亜各国が親族または兄弟であるという大東亜宣言の理念に従い、日本人が中国の歴史や文化に親炙していることを強調しようとしたのであると論じている。

第二章では、先行研究に基づいて、「惜別」の執筆に際して太宰が参照した資料を整理した上で、中国同盟会の成立、日清戦争以降の列強の中国への進出や康有為・梁啓超などによる戊戌変法についての記述が『世界歴史大系』中の第９巻『東洋近世史（二)』(昭和９年）に依拠していることを新たに論証している。さらに、孫文と康有為の対立などについての記述は、吉野作造『対支問題』や周佛海著・犬養健訳『三民主義解説』を参考にしている可能性が高いと推測している。

第三章では、小説「思い出」に出てくる「赤い糸」のモチーフと中国の赤縄説話との関わりについて考察している。中国と日本における赤縄説話を概観し、身分の格差または、それによる家族の反対を表現する箇所の有無、赤い糸の結ばれる時期は「生まれた時」であるかどうか、などといった点を根拠として、太宰治が利用した「赤い糸」のモチーフの典拠を『故事成語考』(江戸時代初期)か、「定婚店」(唐代の李復言の『続玄怪録』に初出）か、沖縄に伝わる赤縄説話のいずれかに絞った上で、ヒロインが赤ん坊であるかそれとも少女であるかを決め手として、結局、太宰の「赤い糸」の典拠は中国の「定婚店」と「灌園嬰女」が融合して成立した沖縄の赤縄説話にあると論証している。

第四章では、太宰治の「服装について」における寒山拾得像の典拠について考察している。太宰が読んだ「寒山詩」は太田悌蔵訳注の『寒山詩』であることを確認し、寒山拾得を主題とする絵画や文学作品を概説した上で、「服装について」における「非凡な格好をして人の神経を混乱させ圧倒する」という表現や、芥川龍之介や井伏鱒二が言及する寒山拾得図絵画との関係を考慮しながら論を展開し、結論として、太宰の寒山拾得像は直接的に、或いは井伏や芥川の作品が介在して間接的

に、曽我蕭白の「寒山拾得図」に基づいて造形したものであると論じている。

第五章では、「惜別」における表現や関連随筆に基づいて、大酒を飲みながら貧しい生活を送っているという竹林七賢観を太宰が持っていたことを確認した上で、そうした竹林七賢観を「晋書」や「世説新語」における竹林七賢に関する記載と対照させて、太宰の竹林七賢観がごく一面的な偏ったものであったことを論じている。

第六章では、視点を変えて、太宰作品がいつ、誰によって中国に紹介され始めたのかということについて検討している。「幻の漢訳」と呼ばれる「竹青」と「惜別」の掲載（予定）雑誌であった『大東亜文学』の性格について説明した上で、訳者の人物像や翻訳の経緯を考慮した結果、昭和 17 年の章克標による「きりぎりす」の中国語訳である「蟋蟀」が太宰治作品の漢訳の嚆矢であることを解明している。

審査においては、太宰のテクストの異同についての目配りや中国語文献の調査が不十分であることなどの疑義が提出されたが、本論文における様々な考察によって、太宰が中国的な要素を自分の作品に利用する上で参照したと思われる文献類が突き止められ、また中国的要素についての太宰の知識の深浅や妥当性が明らかにされている。さらに、太宰の作品の成り立ちについての比較文学的考察においても新たな知見が加えられており、全体として、本論文は太宰と中国の関係だけでなく太宰研究全般に対して学問的寄与をなすものであると認められたため、博士（比較社会文化）の学位に値すると判断した。